

融資は十年、低利息で

本願寺派の震災対策委 初会合で方針確認

本堂・庫裡全壊寺院を優先

兵庫県南部地震で阪神、淡路島地域の多数の寺院が被災した浄土真宗本願寺派（松村了昌総長）の阪神大震災対策委員会（委員長＝篁昭観総務）の初会合が、九、十の両日にわたって本山宗務所で開催された。委員会では、被災寺院の復興資金の融資策を中心に協議され、融資は十年間、低利息または無利息を原則とし、本堂、庫裡が共に全壊した寺院から優先的に行なうことなど基本方針が確認され、これをもとに十八日までに原案を纏めて総局に提出し、今月二十一日から開幕する第二百四十二回定期宗会（北條成之議長）で成案化が図られることになっている。

阪神大震災対策委員会は、六日に開催された第二百四十一回臨時宗会で設置され、同じく同臨時宗会で設置をみた災害対策金庫の具体的な運用等について協議、総局に提案を行なうことになっている。

委員は、篁総務を委員長として被災寺院を抱える兵庫教区（土基謙教務所長）、大阪教区（吉川孝臣教務所長）の両教務所長、教区会議長、組長会長と両教区選出の宗会議員、この他に宗会議員十人により構成。

被災寺院の復興は、宗派内の寺院や宗門内外から拠出された協力金と宗門振興推進金庫からの回金を合わせた十五億円を原資とする災害対策金庫からの融資を中心に推進され、その具体的な運用は対策委員会が協議する。

第一回となる九、十日の委員会では、融資に当たっての基本線をめぐる協議が中心となった。

融資は、原則として被災程度が重い兵庫教区内の被災寺院を対象とすることになり、期間は「十年間」、条件は「無利子」。本堂、庫裡、山門などその他の境内の建造物の損壊状況を点数化して、本堂、庫裡が共に全壊したなど最も重い寺院から優先的に融資する。

点数化に当たっては、震災直後に宗派は約百五十人の本山宗務員を全被災寺院に派遣して被災状況をチェックしているが、この際に様々な角度から撮影された写真や各責任者の実情見聞の報告書がベースで、さらにこれを損害保険会社の専門家らが一つ一つ査察するという。

しかし、この方法では、個々の被災寺院の被災の程度と門徒戸数や財力とは必ずしも一致しないことなど細かい事情までは斟酌できないなど、復興融資に当たって最も配慮されねばならない「公平さ」への配慮を欠く恐れもある。

現在、兵庫教区災害対策委員会（委員長＝土基教務所長）では被災寺院の住職らの要望を徴集しており、こうした現場の声がどの程度原案作成の過程で反映されるかが“鍵”となりそうだ。

今後、対策委員会では今回の協議の結果に基づき十八日に融資方針の原案を纏めて総局に提示。今月二十一日から開かれる第二百四十二回定期宗会で成案化の運びとなる予定である。

また、対策委員会では、被災寺院には今後三年は賦課金の免除してはどうかとの意見も出ているが、その場合はこの減収を補うための財政的な手当てが不可欠で、いわゆる“増税”措置も検討されそう。

なお、大阪教区でも一カ寺において本堂が全壊したのをはじめ、兵庫教区ほど甚大ではないがかなりの寺院が被災しており、これらについては個々の寺院が直接宗派に融資や賦課金の減免措置を申請することになりそうだ。

本堂と庫裡が全壊した本願寺派寺院（芦屋市内）【写真は省略】

兵庫県南部地震

被災者に「ぜんざい」

「薪流会」の臨済各派僧侶

西宮市内で約八百人に

臨済宗各派の寺院で組織する薪流会（総裁＝大井際断方広寺派管長、会長＝横江令澄養徳院住職）は七日、西宮市内の被災者避難所の中学校で兵庫県南部地震被災者救援のぜんざい炊き出しを行なった。当日は横浜、静岡など遠隔地の会員も含め、住職、寺庭約四十人が参加。不自由な避難所生活を送っている人たちを慰めるため熱い一杯のぜんざいを振る舞った。

薪流会は大井管長を囲む会として発足。その後、宗派、僧堂のタテのつながりより、同じ志をもったヨコの連帯で組織を広げ、現在、妙心寺、方広寺、南禅寺、東福寺各派から八十人が会に結集している。

現代における宗教者のあり方を考えるための自主研修会の開催や「上求菩提、下化衆生」の実践という立場から交通遺児救済の托鉢を行なうなど、活発な活動を展開してきたが、この度の震災に当たり救援活動を検討するために実行委員会を組織。被災地西宮出身の事務局長・保子令謙雲龍寺住職が地元と連絡を取り合って、避難所で生活する人たちのために炊き出しを行なうことを決めた。

薪流会が炊き出しを行なったのは西宮北口に近い平木中学校。同校及び隣接する平木小が避難所に充てられており、平木中の上田昭義校長が保子事務局長の恩師でもあることから、この場所が選ばれた。

準備したぜんざいは千二百人分、大きめの餅が千八百個。そのほか、使い捨てカイロ十万円分、チョコレート、ドーナツ、梅干し各千個なども被災者へのプレゼントのため用意された。支援物資の中には愛知県春日井市の小学生が持ち寄ったカイロや文具類なども含まれていた。この炊き出しのため、名古屋徳源寺や一宮妙興寺からも義援金が寄せられたという。

この日、横江会長、宇佐見宗玄副会長ら薪流会メンバーと賛同者らは午前十時から、校庭の一角に幾つもの大鍋を据えてぜんざいの炊き出しを開始。午後三時まで、平木中・小学校の体育館で不自由な生活を送っている約八百人の避難者に焼きたての餅を入れた熱い一杯のぜんざいとお茶や漬物を振る舞った。

また、今後深刻化が予想される被災者の“心の健康”の問題で仏教者として為しうることを探るため、被災者や現地で活動するボランティア活動家などに避難所生活の実情と要望を聞いた。

また、平木中学校と同小学校の校長に、避難所に飾るための花籠と「風吹不動天辺月雪圧難摧石間底松」(『普燈録』)という大井総裁の墨跡色紙を贈呈した。

なお薪流会は、三月初めに名古屋市内で被災者救援の托鉢を実施することを計画しているが、横江会長によれば、さらに「被災者の精神的な支えになるような活動が何かできないものか検討している」という。

被災者にぜんざいを振る舞う薪流会の僧侶【写真は省略】